

特別講演

特別講演 1

11月4日(金) 10:50~11:50 第1会場(コスモス)

座長：加藤 忠史 順天堂大学医学部・大学院医学研究科精神医学講座

SL1

Probing and Rescuing Dysfunctional Brain Circuits in Depression

Conor Liston Weill Cornell Medicine

特別講演 2

11月5日(土) 15:20~16:20 第1会場(コスモス)

座長：下田 和孝 獨協医科大学精神神経医学講座

SL2

The Treatment of Schizophrenia : How Far Have We Come?

John M. Kane Donald and Barbara Zucker School of Medicine at Hofstra/Northwell, New York, USA

特別講演 3

11月6日(日) 11:00~12:00 第1会場(コスモス)

座長：池田 和隆 公益財団法人東京都医学総合研究所精神行動医学研究分野依存性物質プロジェクト

SL3

Bases of appropriate use and development of medicines for the central nervous system

Joseph Zohar Post-Trauma Center, Sheba Medical Center, Israel; Tel Aviv University, Israel

日本精神薬学会 理事長講演

日本精神薬学会 理事長講演

11月5日(土) 10:50~11:50 第1会場(コスモス)

座長：吉尾 隆

公益財団法人住吉偕成会住吉病院/昭和大学薬学部病院薬剤学
講座/昭和大学附属烏山病院

PL

精神科薬剤師の軌跡、そして未来への期待

黒沢 雅広 昭和大学附属烏山病院

特別教育講演

特別教育講演

11月5日(土) 16:30~17:30 第3会場(601)

座長：兼子 幸一

社会医療法人仁厚会医療福祉センター倉吉病院

SEL

Motivation and Learning to Improve Cognitive Health in People with Psychotic Disorders

Alice Medalia Columbia University Irving Medical Center, Vagelos College of Physicians and Surgeons/
Cognitive Health Services, NY State Office of Mental Health

教育講演

教育講演 1

11月4日(金) 9:00~9:50 第8会場(立山)

座長：小坂 浩隆 福井大学医学部精神医学

EL1 自閉スペクトラム症研究 最新の動向：拡散から収束へ
山末 英典 浜松医科大学精神医学講座

教育講演 2

11月4日(金) 13:10~14:00 第8会場(立山)

座長：永井 努 昭和大学薬学部病院薬剤学講座・昭和大学附属烏山病院薬局

EL2 統合失調症における薬物治療の適正化
吉尾 隆 公益財団法人住吉偕成会精神科薬物療法サポートセンター/昭和大学薬学部病院薬剤学講座

教育講演 3

11月4日(金) 14:10~15:00 第8会場(立山)

座長：成本 迅 京都府立医科大学大学院医学系研究科精神機能病態学

EL3 強迫性障害の臨床と病態研究の現状
中尾 智博 九州大学大学院医学研究院精神病態医学

教育講演 4

11月4日(金) 16:40~17:30 第8会場(立山)

座長：喜田 聡 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻栄養化学研究室

EL4 ストレス適応の個体差構築の分子神経基盤
内田 周作 京都大学大学院医学研究科メディカルイノベーションセンター

教育講演 5

11月4日(金) 17:40~18:30 第8会場(立山)

座長：桑原 秀徳 医療法人せのがわ瀬野川病院

EL5 認知症薬物治療の現状と将来
中村 祐 香川大学・医・精神神経

教育講演 6

11月5日(土) 9:00~9:50 第8会場(立山)

座長：古屋敷智之 神戸大学大学院医学研究科薬理学分野

EL6 慢性痛による負情動生成の神経機構
南 雅文 北海道大学大学院薬学研究院薬理学研究室

教育講演 7

11月5日(土) 9:50~10:40 第8会場(立山)

座長：大森 哲郎 社会医療法人あいざと会藍里病院あいざと精神医療研究所

EL7 最新のせん妄病態仮説に基づく予防・治療戦略

八田耕太郎 順天堂大学医学部附属練馬病院

教育講演 8

11月5日(土) 13:10~14:00 第8会場(立山)

座長：久住 一郎 北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室

EL8 抗うつ薬の精神薬理～モノアミン仮説の再構成と薬物選択における次元的アプローチ～

小山 司 医療法人優仁会滝川中央病院

教育講演 9

11月5日(土) 14:10~15:00 第8会場(立山)

座長：井上 猛 東京医科大学精神医学分野

EL9 うつ病の異種性に着目した臨床診断補助バイオマーカーの探索研究への旅路

三國 雅彦 社会医療法人函館渡辺病院精神科/群馬大学/北海道大学大学院医学研究院精神医学分野

教育講演 10

11月5日(土) 16:30~17:20 第8会場(立山)

座長：黒沢 雅広 昭和大学薬学部病院薬剤学講座/昭和大学附属烏山病院薬局

EL10 ベッドサイドから考える疾患研究

糸川 昌成 東京都医学総合研究所/東京都立松沢病院

教育講演 11

11月5日(土) 17:30~18:20 第8会場(立山)

座長：亀井 浩行 名城大学薬学部病院薬学研究室

EL11 全ゲノム関連解析を起点とした双極性障害病態解明への道程

岩田 伸生 藤田医科大学医学部精神神経科学講座

教育講演 12

11月6日(日) 9:00~9:50 第8会場(立山)

座長：大隅 典子 東北大学大学院医学系研究科発生発達神経科学分野

EL12 動物・細胞モデルを用いた精神疾患の病態解明

内匠 透 神戸大学大学院医学研究科

教育講演 13

11月6日(日) 10:00~10:50 第8会場(立山)

座長：金生由紀子

東京大学大学院医学系研究科こころの発達医学分野/東京大学医学部附属病院こころの発達診療部

EL13 注意欠如・多動症 (ADHD) の病態と臨床

岡田 俊 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部

教育講演 14

11月6日(日) 13:20~14:10 第8会場(立山)

座長：橋本 直樹

北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室

EL14 統合失調症の認知機能障害に着目した臨床・基礎研究

菊知 充 金沢大学医学系研究科精神行動科学

教育講演 15

オンデマンド配信

EL15 機械学習法・深層学習の手法概要と生命科学分野への応用

中村 周吾 東洋大学・情報連携学部 (INIAD)

教育講演 16

オンデマンド配信

EL16 認知行動療法の神経生理学的基盤とその近未来的展開

岡本 泰昌 広島大学大学院医系科学研究科精神神経医科学

教育講演 17

オンデマンド配信

EL17 「統合失調症の病態解明研究」の目的と方法の再設定

笠井 清登 東京大学大学院医学系研究科精神医学分野

教育講演 18

オンデマンド配信

EL18 神経性やせ症の病態、治療について

中里 道子 国際医療福祉大学医学部精神医学

教育講演 19

オンデマンド配信

EL19 PTSD の臨床と病態研究の現状

金 吉晴 国立精神・神経センター

教育講演 20

オンデマンド配信

EL20 臨床薬理からみる理想的なトランスレーショナル研究

古郡 規雄 獨協医科大学精神神経医学講座

教育講演 21

オンデマンド配信

EL21 精神疾患及び向精神薬の運転技能への影響を考える

尾崎 紀夫 名古屋大学大学院医学系研究科精神疾患病態解明学

教育講演 22

オンデマンド配信

EL22 妊娠・出産と向精神薬

根本 清貴 筑波大学医学医療系精神医学

教育講演 23

オンデマンド配信

EL23 双極性障害の維持療法：気分安定薬か、抗精神病薬か

加藤 忠史 順天堂大学医学部精神医学講座

教育講演 24

オンデマンド配信

EL24 診療報酬改定は効果があったのか？—向精神薬の多剤併用と長期処方問題—

三島 和夫 秋田大院・医・精神科学講座

教育講演 25

オンデマンド配信

EL25 死に至る病を有した患者の精神的ケア：精神医学は患者さん、ご家族の幸せに貢献できているのだろうか？

明智 龍男 名古屋市立大学大学院医学研究科精神・認知・行動医学分野

教育講演 26

オンデマンド配信

EL26 ゲノム 3 次元構造の長期的変化と精神神経疾患

宮川 剛 藤田医科大学

教育講演 27

オンデマンド配信

EL27 人はなぜ依存症になるのか～物質依存症の理解と援助

松本 俊彦 国立精神・神経医療研究センター

教育講演 28

オンデマンド配信

EL28 認知症疾患のバイオマーカー

岩田 淳 東京都健康長寿医療センター

教育講演 29

オンデマンド配信

EL29 依存症の発症機序と精神薬理

溝口 博之 名古屋大学医学部附属病院薬剤部

教育講演 30

オンデマンド配信

EL30

薬剤師の日常業務におけるクリニカルクエッションから臨床研究へ

亀井 浩行 名城大学薬学部

教育講演 31

オンデマンド配信

EL31

看護職がストレングスモデルを学ぶ理由—問題解決型支援と伴走型支援のハイブリッドモデルの実装—

萱間 真美 国立国際医療研究センター国立看護大学校

教育講演 32

オンデマンド配信

EL32

抗精神病薬の有害事象を低減する薬物の発見と期待—ジスキネジアを中心に—

金子 周司 京都大院・薬・生体機能解析

シンポジウム

シンポジウム 1 (BP・CNP 企画シンポジウム) 11月4日(金) 8:40~10:40 第1会場 (コスモス)

精神疾患とオミックス研究最前線

座長：加藤 忠史
金沢 徹文

順天堂大学医学部・大学院医学研究科精神医学講座
大阪医科薬科大学神経精神医学教室

【趣旨・狙い】

様々な網羅的解析手法(e.g. オミックス)は、膨大な情報をもたらし、多くの疾患の感受性遺伝子あるいはバイオマーカーの同定に貢献してきた。しかし、精神疾患ではまだまだ確度の高い結果は得られているとは言えず、今後のブレークスルーが期待される。本シンポジウムでは、ゲノム(遺伝子)、メチローム(メチル化)、メタボローム(低分子化合物)、トランスクリプトーム(発現)の観点から精神疾患の病態に迫る研究をまとめるとともに、今後の方向性を議論する。

S1-1 精神疾患のゲノム解析

池田 匡志 藤田医科大学医学部精神神経科学

S1-2 精神疾患におけるエピゲノム解析

岩本 和也 熊本大学大学院生命科学研究部分子脳科学講座

S1-3 メンタルヘルス領域における血液メタボローム解析による「こころの不調」の早期発見

加藤 隆弘 九州大学大学院医学研究院精神病態医学

S1-4 トランスクリプトームとうつ病 PGx—miRNA を中心に—

加藤 正樹 関西医科大学医学部精神神経科学講座

脆弱性とレジリエンスの精神疾患研究—可塑性の脳科学—

座長：尾崎 紀夫
新井 誠

名古屋大学医学部附属病院親と子どもの心療科
東京都医学総合研究所精神行動医学研究分野統合失調症プロジェクト

【趣旨・狙い】

精神疾患の脳科学研究は、1990年代以降の技術革新により飛躍的な発展を遂げ、様々な知見が集積してきた。近年の脳科学による精神疾患研究では、脆弱性にフォーカスされがちだった病態脳から、樹状突起のストレスに対する抵抗性増強やヒト脳領域間の相互代償的な形態変化など、レジリエンスを示唆する様々な所見がとらえられている。形而下を対象とする癌や免疫など身体疾患の研究に比べて、精神疾患研究は形而上の症候学を出発点とするため難航することが多かった。脳の可塑性とレジリエンスに注目し、モデル動物の神経形態の制御研究、エフェクトサイズの大きな変異を有する患者 iPS 細胞を用いた解析、代謝モデル動物の神経科学、脳回路・分子ネットワーク研究と、多角的かつ縦横無尽に精神疾患の病態を討論する。本シンポジウムのねらいは、可塑性からレジリエンスを見据えた議論によって、形而上から形而下への奇跡的な位相転換を果たすことである。

S2-1 慢性社会ストレスによるシナプス構造変化とその分子機序の解析

永井 裕崇 神戸大院・医・薬理

S2-2 発症リスク変異を有する精神疾患患者で引き起こされる共通の神経発達異常

有岡 祐子 名古屋大学医学部附属病院・先端医療開発部/名古屋大学大学院・医学系研究科・精神疾患病態解明学

S2-3 柔軟な認知行動のための神経回路機構

疋田 貴俊 大阪大学蛋白質研究所高次脳機能学研究室

S2-4 統合失調症における糖化ストレス蓄積の分子機序

鳥海 和也 東京都医学総合研究所統合失調症プロジェクト

S2-5 脆弱性とレジリエンスの精神疾患研究（指定討論）

糸川 昌成 東京都医学総合研究所

タウイメージングによる精神疾患の病態解明と新たな治療戦略

座長：高畑 圭輔

国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構量子生命・医学部門
量子医科学研究所脳機能イメージング研究部

久保田 学

京都大学医学部附属病院精神科神経科

【趣旨・狙い】

近年の死後脳研究および基礎・臨床研究により、精神疾患の一部、特に老年期精神障害や頭部外傷後の遅発性脳障害の臨床像の背景に、脳内異常蛋白蓄積による神経変性の関与を示す知見が蓄積しつつある。こうしたタウイメージングの活用により、タウの異常蓄積パターンを切り口とした精神症状発現メカニズムの解明、精神疾患の新たな層別化、ならびに最適化された新規治療戦略の構築が期待される。本シンポジウムでは、老年期の精神病性障害および気分障害、認知症、交通外傷やスポーツ外傷による遅発性脳障害のタウ PET 研究ならびに同一個体における PET と死後脳所見とを対応させた画像病理相関についての我々の最新の研究を紹介し、考察を加える。

S3-1 前頭側頭型認知症および老年期精神病におけるタウイメージング

久保田 学 京都大学医学部附属病院精神科神経科/量子科学技術研究開発機構

S3-2 老年期気分障害のタウイメージング

黒瀬 心 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

S3-3 タウ PET 画像病理相関

鈴木 寿臣 国立病院機構下総精神医療センター

S3-4 単発性重症頭部外傷後の慢性期におけるタウイメージング

植野 仙経 京都大学大学院医学研究科精神医学教室

S3-5 反復性軽度頭部外傷による遅発性精神症状と脳内タウ病変との関連について

高畑 圭輔 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構量子生命・医学部門量子医科学研究所脳機能イメージング研究部

座長：原 貴敏
住吉 太幹

国立精神・神経医療研究センター病院身体リハビリテーション部
国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神
医学研究部

【趣旨・狙い】

ニューロモデュレーション(NM)は、精神科、脳神経内科、脳神経外科、リハビリテーション科などで用いられている。例えば、難治性うつ病に対する反復性経頭蓋磁気刺激が保険収載され、磁気けいれん療法の検討も待たれる。また、小型の刺激装置で簡便に施行できる経頭蓋直流刺激も、うつ病や統合失調症などの精神疾患や脳卒中後の半側空間無視などに効果を示すとされる。一方、脳深部刺激を用いたパーキンソン病やトゥレット症候群の外科治療、および迷走神経刺激によるうつ病治療などでも、診療科を跨ぐ協働によりNMの効果を支える知見が蓄積されている。今回、各種NMの開発動向や課題について、領域横断的な視点を交えた討議や情報を発信したい。

S4-1 精神科領域におけるニューロモデュレーション治療について

竹林 実 熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学講座

S4-2 精神神経疾患への反復経頭蓋磁気刺激 (rTMS)

鬼頭 伸輔 国立精神・神経医療研究センター/東京慈恵会医科大学精神医学講座

S4-3 統合失調症の認知機能障害に対する経頭蓋直流電気刺激の効果

山田 悠至 国立精神・神経医療研究センター病院司法精神診療部

S4-4 脳損傷後高次脳機能障害に対するニューロモジュレーション

原 貴敏 国立精神・神経医療研究センター病院

S4-5 精神疾患に対する脳神経外科ニューロモジュレーション

岩崎 真樹 国立精神・神経医療研究センター病院脳神経外科

神経発達症のなりたち～炎症の関与はどこまでわかっているか

座長：土屋 賢治
高橋 長秀

浜松医科大学子どものこころの発達研究センター
名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科

【趣旨・狙い】

近年、神経発達症の発症と病態には、新生児期に端を発する炎症・神経炎症が深く関わっていることが明らかになりつつある。一方で、神経発達症において、なぜ炎症が起こり、生涯にわたりどのように変化するのか、発症を抑制するための標的分子の同定などは未解明である。本シンポジウムにおいては、臍帯血、脳イメージング、胎盤機能、動物モデルなど様々な手法を用いて本テーマにアプローチしている研究者にご登壇頂き、現在までに明らかになっている神経発達症における炎症の役割を確認し、今後の研究の方向性について議論を深めることを目的とする。

S5-1 臍帯血中のサイトカインの上昇と神経発達症

高橋 長秀 名古屋大学医学部附属病院親と子どもの心療科/浜松医科大学子どものこころの発達研究センター

S5-2 神経発達症患者における脳内神経炎症の可視化

横倉 正倫 浜松医科大学精神医学講座

S5-3 胎盤機能の変化が引き起こす新生児期の神経炎症と神経発達症

白井 紀好 大阪大院・医・神経細胞生物学/大阪大院・連合小児/精神医療・こころの科学・依存症

S5-4 ミクログリア由来 BDNF と前頭前野の E/I バランス

牧之段 学 奈良県立医科大学・医・精神医学

座長：古屋敷智之
服部 信孝

神戸大学大学院医学研究科薬理学分野

順天堂大学大学院医学研究科神経学

【趣旨・狙い】

精神疾患と神経疾患は異なる疾患概念であり、長く別々に研究が進められてきた。しかし精神疾患と神経疾患の併存リスクや神経疾患における精神症状が次第に注目され、精神疾患と神経疾患に共通する病態機序が推測されるようになった。さらに近年、患者検体を扱う臨床研究とモデル動物を用いた基礎研究の両面から、精神疾患と神経疾患のいずれにも、炎症・免疫、代謝、内分泌などを介する脳末梢関連の関与が示唆されるようになった。本シンポジウムでは、精神疾患と神経疾患に関わる脳末梢関連について最新の研究を紹介し、疾患横断的な病態解明と創薬への展望を議論したい。

S6-1 ストレス・うつ病における脳と末梢の炎症反応の役割

古屋敷智之 神戸大学大学院医学研究科薬理学分野

S6-2 脳神経回路の修復と老化

村松里衣子 国立精神・神経医療研究センター神経研究所神経薬理研究部

S6-3 内受容感覚と情動にかかわる脳ネットワークの連関の解析

佐々木拓哉 東北大院・薬・薬理

S6-4 ヒト血液由来直接誘導ミクログリア様(iMG)細胞による精神疾患リバーstransレーショナル研究

加藤 隆弘 九州大学大学院医学研究院精神病態医学

S6-5 神経変性疾患の腸脳連関現象をターゲットとした治療戦略

服部 信孝 順天堂大・医・脳神経内科

脳画像研究により精神疾患はどこまでわかったか、そして今何をやるべきなのか

座長：八幡 憲明

国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構量子生命・医学部門
量子生命科学研究所

鬼塚 俊明

九州大学大学院医学研究院精神病態医学神経画像解析学講座

【趣旨・狙い】

磁気共鳴画像や脳波等の神経画像に精神疾患の機能的・形態的特徴を見出し、病態解明や客観的診断方法・新規治療法の確立を目指す研究が盛んに進められている。近年は、多施設共同研究で集積された大規模画像データを用いて得られた所見の信頼性・再現性を高め、これに機械学習等データ駆動型手法を用いて疾患の特徴抽出を試みる研究が潮流の一つとなっている。また、導かれた指標を疾患バイオマーカーと位置づけ、これらの指標が診断の新たな一助となり、複数疾患の横断的鑑別に応用されることが期待されている。本シンポジウムでは、脳画像研究の最前線に立つ研究者に最新の研究成果や現状の課題、今後の展望について述べてもらう。

S7-1 精神疾患のイメージングバイオマーカー

高橋 英彦

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科精神行動医学/東京医科歯科大学脳統合機能研究センター

S7-2 早期精神病の脳形態特徴と臨床応用への課題

高橋 努

富山大学学術研究部医学系神経精神医学講座/富山大学研究推進機構アイドリッグ脳科学研究センター

S7-3 大脳皮質構造画像の大規模データによる精神疾患横断解析

松本 純弥

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

S7-4 脳 MRI 構造画像による精神疾患の機械学習と、その精緻化に向けた取り組み

小池 進介

東京大学心の多様性と適応の連携研究機構

S7-5 精神疾患のサブタイプや再定義を目指した階層的教師有・教師無機械学習法～調和された多施設多疾患安静時 fMRI データを用いた研究～

山下 歩

株式会社国際電気通信基礎技術研究所脳情報通信総合研究所/東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻

S7-6 精神疾患の神経生理学的知見—統合失調症を中心に—

平野 羊嗣

九州大学大学院医学研究院精神病態医学

ついに完成！統合失調症薬物治療ガイドライン（改訂版）2022

座長：稲田 健 北里大学医学部精神科学
古郡 規雄 獨協医科大学精神神経医学講座

【趣旨・狙い】

2015年日本神経精神薬理学会は「統合失調症薬物治療ガイドライン」を作成し公開した。2018年にはガイドラインの一般向け書籍として『統合失調症薬物治療ガイド—患者さん・ご家族・支援者のために—』を公表した。これらの書籍、講習会を通じて多くの意見を得、また研究の進歩により新たなエビデンスによる情報の刷新が必要となった。このため、2018年より日本神経精神薬理学会と日本臨床精神神経薬理学会が、ガイドライン改訂作業に着手した。そしてついに2022年5月20日に統合失調症薬物治療ガイドライン2022が発表された。本シンポジウムでは作成メンバーを中心に、本ガイドラインの要点を解説していただく。

S8-1 統合失調症薬物治療ガイドライン2022の作成の経緯と概要

橋本 亮太 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

S8-2 パート1 概略：本ガイドラインの背景と改訂における共同意思決定のプロセス

市橋 香代 東京大学医学部附属病院精神神経科

S8-3 安定・維持期の統合失調症治療

竹内 啓善 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

S8-4 抗精神病薬の薬剤性錐体外路系副作用およびその他の副作用

坪井 貴嗣 杏林大学医学部精神神経科学教室

S8-5 治療抵抗性統合失調症

嶽北 佳輝 関西医科大学医学部精神神経科学講座

S8-6 統合失調症の睡眠障害への対応

高江洲義和 琉球大学医学部精神病態医学講座

S8-7 当事者の立場で話す新ガイドラインに妊娠・授乳の項目が加わった意義

鈴木みずめ 横浜ピアスタッフ協会/子育てピアサポートグループゆらいく

S8-8 指定発言1

中込 和幸 国立精神・神経医療研究センター

S8-9 指定発言2

染矢 俊幸 新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野

Neuromodulator and neural circuit mechanisms of extinction : new insights and clinical potential.

座長 : Satoshi Kida The University of Tokyo
Andrew Holmes NIH

【趣旨・狙い】

記憶消去 (extinction) とは条件づけ成立後に条件刺激のみの提示が続くことで、条件反応の低下が起こる現象であり、一種の適応行動である。恐怖条件づけを中心として、ここ 10 年間で消去の機構解明に向けた研究は世界的に大いに進展している。一方、この消去制御の破綻は、心的外傷後ストレス障害を中心として、様々な精神疾患と関連すると考えられており、消去機構に基づく臨床的応用も試みられている。本シンポジウムでは、恐怖記憶課題や機械学習課題等を用いて、行動・回路・細胞・分子レベルで消去機構の解明に従事する研究者が国内外から集結し、最新の研究成果を報告し、さらに、研究成果の医療応用への展望についても議論する。

S9-1 Neuromodulation of neural circuits underlying fear

Andrew Holmes NIH

S9-2 Mechanisms of transition of memory phases from fear to extinction

Satoshi Kida The University of Tokyo

S9-3 The cognitive effects of thalamostriatal degeneration are ameliorated by normalizing striatal cholinergic activity

Bernard Balleine UNSW Sydney

S9-4 Microglial regulation of conditioned fear extinction

Paul Frankland The Hospital for Sick Children

COVID-19 せん妄・認知機能障害の病態生理と治療

座長：谷向 仁

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻先端作業療法学講座
座脳機能リハビリテーション分野/京都大学医学部附属病院緩和医療科

小川 朝生

国立がん研究センター東病院精神腫瘍科、先端医療開発センター精神腫瘍学開発分野

【趣旨・狙い】

COVID-19 肺炎とせん妄の合併率は 84.3% という報告もあり、COVID-19 肺炎を知る上でせん妄の知識は欠かせない。肺炎重症度や呼吸器感染症であるための行動制限の問題に加え、COVID 脳症に代表される多発微小出血、脳血栓、臭覚障害や味覚障害といった中枢神経系への影響も原因としてあげられる。COVID-19 罹患後症状に認知機能障害や brain-fog と呼ばれる症状も認められることからせん妄と後遺症との関連も考えられる。本シンポジウムでは COVID-19 患者のせん妄や認知機能障害の経験の報告を行い、症状の特徴や治療方法を最新のエビデンスを交え議論する。また医療従事者が COVID-19 感染した場合の後遺症を意識したメンタルヘルスケアの実際を呈示する。

S10-1 COVID-19 せん妄の特徴と病態生理～従来のせん妄との比較～

大谷 恭平 神戸市立医療センター中央市民病院精神・神経科

S10-2 COVID-19 の炎症に伴う精神症状への影響―せん妄と感染後遺症の視点から―

上村 恵一 国家公務員共済組合連合会斗南病院精神科

S10-3 COVID-19 せん妄の薬物療法 各国ガイドラインの比較

佐伯 吉規 がん研有明病院緩和治療科

S10-4 COVID-19 関連認知機能障害

小川 朝生 国立がん研究センター東病院精神腫瘍科/国立がん研究センター先端医療開発センター精神腫瘍学
開発分野

稀な遺伝子変異やフェノタイプから精神疾患を考える

座長：尾関 祐二
中村 雅之

滋賀医科大学精神医学講座
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科精神機能病学分野

【趣旨・狙い】

精神疾患の病態研究では疾患の家族集積性に基ついた大規模な遺伝情報の検索が行われ、これまで有用な情報がもたらされている。一方で精神科臨床において、各種診断基準に包含される患者が持つであろう生物学的病態は多様ではないかとの印象を持つ医師も少なくないようである。本シンポジウムでは稀ではあるが明らかな生物学的な特徴（遺伝子の変異やフェノタイプ、多発家系など）を伴う精神疾患患者を対象としてその病態を解析し、その結果を普遍化する、もしくはそうした特徴を持つ一群を見出すような試みに焦点を当てる。こうした試みは精神疾患の病態解明に一定の意味を与える可能性を秘めていると考えられる。

S11-1 特徴的な表現型を有する家系例から見出した稀な遺伝子変異を伴う精神疾患

中村 雅之 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科精神機能病学分野

S11-2 特徴的な所見を持つ稀な統合失調症の研究は「統合失調症の理解」に寄与するか—副作用や染色体転座など具体例からの検討—

尾関 祐二 滋賀医科大学精神医学講座

S11-3 ナノポアシーケンサーを用いた統合失調症のゲノム—エピゲノム解析

森本 芳郎 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経科学

S11-4 統合失調症の稀なリスク遺伝子変異の探索

渡部雄一郎 新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野

双極性障害診療に関するガイドライン

座長：渡邊 衡一郎
松尾 幸治

杏林大学医学部精神神経科学教室
埼玉医科大学医学部精神医学

【趣旨・狙い】

日本うつ病学会では2022年7月に双極性障害の診療ガイドラインの改訂版を発表した。本シンポジウムでは、その執筆リーダーによるガイドラインの概要紹介のほか、コアメンバーとして活躍された当事者の方にガイドライン作成参加の感想や医療者への要望などを語って頂く。本ガイドラインは可能な限り Minds に従い、6つのセクションからなる50のクリニカルクエストについて、システムティックレビューおよびナラティブレビューにより推奨および要約として診療や治療の提案をしている。

S12-1 躁病エピソード

本村 啓介 国立病院機構さいがた医療センター

S12-2 「抑うつエピソード」の概要と解説

田中 輝明 KKR 札幌医療センター精神科

S12-3 双極性障害診療ガイドライン 維持療法 (ナラティブ)

仁王進太郎 東京都済生会中央病院

S12-4 副作用とモニタリング

鈴木 映二 東北医科薬科大学医学部精神科学教室

S12-5 周産期

根本 清貴 筑波大学医学医療系精神医学

S12-6 双極性障害診療に関するガイドライン 心理社会的支援

宗 未来 東京歯科大学市川総合病院精神科

S12-7 初めてガイドラインの委員会に参加して、見て聞いて、私が、感じたこと。

窪田 信子 ノーチラス会

シンポジウム 13 (NP 企画シンポジウム) 11月4日(金) 16:40~18:40 第3会場(601)

システム神経科学的アプローチに基づく神経精神薬理学研究の最前線

座長：野村 洋 名古屋市立大学大学院医学研究科認知機能病態学
大澤 匡弘 名古屋市立大学大学院薬学研究科・薬学部神経薬理学分野

【趣旨・狙い】

システム神経科学分野の技術・方法論の開発は飛躍的に進んでおり、神経活動を大規模・精密に測定、解析し、そして柔軟に操作することができるようになってきた。こうした新たな技術を神経精神薬理学に活かし、精神疾患の病態解明や新たな治療アプローチの開発に結びつけることが期待される。本シンポジウムでは、痛み、ストレス、記憶、てんかん等を対象とした、システム神経科学の新たな切り口による研究を紹介し、神経精神薬理学研究の未来にどのように貢献できるかを議論する。

S13-1 記憶の想起を調節する神経回路メカニズム

野村 洋 名古屋市立大学大学院医学研究科認知機能病態学

S13-2 ストレス感受性を説明する海馬の記憶メカニズム

佐々木拓哉 東北大院・薬・薬理

S13-3 神経・精神疾患の閉ループ制御

竹内 雄一 北海道大学大学院薬学研究院医療薬学部門

S13-4 疼痛の慢性化を引き起こす中枢神経回路の同定

大澤 匡弘 名市大・院薬・神経薬理

シンポジウム 14 11月4日(金) 16:40~18:40 第4会場(606)

認知症コホートをを用いた生物学的研究の最前線

座長：小原 知之 九州大学病院精神科神経科
上野 修一 愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学

【趣旨・狙い】

認知症など高齢者の精神医学については、他の関連学会に比較し、発表がやや少ないことがあり、参加される先生方に、認知症の分子医学について理解を進めるシンポジウムを開催したいと考えています。全国4つのコホート研究から抽出されたデータから精神医学教室で進めている生物学的な研究についてまとめたいと思います。よろしくお願いします。

S14-1 地域住民における認知症の実態とその危険因子：久山町研究

小原 知之 九州大学大学院医学研究院精神病態医学/九州大学大学院医学研究院衛生公衆衛生学

S14-2 東京都荒川区高齢者/超高齢者コホートにおける生物学的研究

新村 秀人 東洋英和女学院大学人間科学部/慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

S14-3 地域在住高齢者における脳室・くも膜下腔脳脊髄液体積の加齢性変化とその臨床的意義

日高 洋介 熊本大学病院神経精神科

S14-4 中山町コホートをを用いた生物学的研究

伊賀 淳一 愛媛大学大学院精神神経科学講座

精神展開剤 (Psychedelics) の歴史、基礎、臨床

座長：内田 裕之
坪井 貴嗣

慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室
杏林大学医学部精神神経科学教室

【趣旨・狙い】

近年、精神展開剤 (psychedelics) をうつ病、依存症、PTSD などの精神科疾患の治療に応用する動きが活発になり、それは“Psychedelics renaissance”と呼ばれている。海外では多数の臨床試験が実施され、専門のセンターの創設も続いている。本シンポジウムでは、3名の演者が強力な治療効果を有する精神展開剤の歴史を概観し、現在までに報告されている基礎・臨床データを紹介する。そして、3名の指定討論者も加わり (橋本謙二、福本健一、中島振一郎)、本分野の今後の展望を議論する。

S15-1 うつ病・ストレスモデルマウスの情動行動異常に対する精神展開薬の緩解作用

衣斐 大祐 名城大・薬・薬品作用

S15-2 精神展開剤 (Psychedelics) の歴史と現在

内田 裕之 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

S15-3 精神展開剤の臨床試験レビュー

谷 英明 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

朝に起きられない中高大生への生物学的・薬理的な治療アプローチ

座長：神林 崇
小鳥居 望

筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構・茨城県こころの医療センター
医療法人仁祐会小鳥居諫早病院

【趣旨・狙い】

朝に起きられない中高大生は多く、有効な治療法が乏しくて、対応に難渋して来たが、コロナ禍で一層増えた印象がある。小学生までは成長と共に入眠時間は遅くなり、睡眠時間が短くなるが、第二次性徴と共に再び睡眠時間が延長する。起立性調節障害と睡眠相後退症群は別々の疾患概念であるが、併存していることが多くみられる。治療としては睡眠表の記載をすることが第一歩になる。早寝対策としては、メラトニン系薬剤やオレキシン拮抗薬の有効性が高い。起床対策としては、少量のアリピプラゾールで起床が促される。心理的・社会的な支援も必須であるが、薬物療法としては3系統の治療手段を得て、以前に比べると格段に治療手段が進化した。

S16-1 長時間睡眠や睡眠・覚醒リズムの後退に対する治療戦略

大森 佑貴 東京都健康長寿医療センター精神科/医療法人社団大坪会小石川東京病院

S16-2 気分障害併存患者への対応

高江洲義和 琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座

S16-3 低用量のアリピプラゾールの起床困難への効果と薬理的背景への考察

小鳥居 望 医療法人仁祐会小鳥居諫早病院

S16-4 概日リズムを整える：睡眠衛生指導とメラトニン受容体アゴニストの使用法

志村 哲祥 東京医科大学精神医学分野/財団法人神経研究所

シンポジウム 17(CNP 企画シンポジウム) 11月5日(土) 8:40~10:40 第1会場(コスモス)

多職種や当事者も含めたベンゾジアゼピン受容体作動薬の適正使用・出口戦略

座長：稲田 健
三島 和夫北里大学医学部精神科学
秋田大学大学院医学系研究科精神科学講座

【趣旨・狙い】

ベンゾジアゼピン受容体作動薬の適正使用・出口戦略は、国家的重要課題であり、厚生労働科学研究班(高江洲班)において、精神科医、プライマリ・ケア医、薬剤師、当事者が参加して戦略の策定と実装化が進められている。本シンポジウムでは、多くの皆さまにご協力いただいたエキスパートコンセンサス調査の結果を踏まえ、出口戦略の現在を報告し、議論を深めたい。

S17-1 ベンゾジアゼピン受容体作動等の適正使用・出口戦略の普及・実装化に向けて

高江洲義和 琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座

S17-2 ベンゾジアゼピン受容体作動薬の適正使用について：プライマリケアの立場から

家 研也 聖マリアンナ医科大学・川崎市立多摩病院総合診療内科

S17-3 ベンゾジアゼピン受容体作動薬の適正使用・出口戦略における Decision Aid の活用：SDM の促進にむけて

青木 裕見 聖路加国際大学大学院看護学研究科

S17-4 ベンゾジアゼピン受容体作動薬の適正使用・出口戦略に向けて薬剤師が出来ること

高橋 結花 東京女子医科大学病院薬剤部

S17-5 話し合いながらベンゾジアゼピン系の薬と付き合う

宇田川 健 認定 NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ

精神科薬物療法のポリファーマシーを再考する

座長：三輪 高市
中村 友喜鈴鹿医療科学大学薬学部薬学科・大学院薬学研究科
三重県立こころの医療センター診療技術部薬剤室

【趣旨・狙い】

近年、精神科では多剤大量療法からの脱却が進んできている。しかしながら、未だにみられるポリファーマシーや服薬に伴うQOL低下、服薬の過誤、薬物相互作用などに対する薬剤師の専門的知見に基づいた関わりが重要性を増してきている。

そこで本シンポジウムでは、医師や薬剤師のそれぞれ異なった視点からみた精神科薬物療法の現状と課題を共有することで、今後の精神科薬物療法のポリファーマシー改善および精神科薬剤師業務の充実に向けた一助としたい。

S18-1 統合失調症に対する抗精神病薬多剤併用療法の可能性について考える

鍋島 賢大 特定医療法人佐藤会弓削病院

S18-2 ポリファーマシーに対する精神科薬剤師の役割

中村 友喜 三重県立こころの医療センター感染管理室/診療技術部薬剤室

S18-3 精神科病棟を持たない一般病院におけるポリファーマシー対策—事例と対策—

別所 千枝 広島県厚生農業協同組合連合会尾道総合病院薬剤部

S18-4 患者が処方内容に納得できるように、薬局薬剤師にできること

中田 裕介 合資会社中田薬店ゆう薬局

脳内報酬系をめぐって—意欲と衝動の違いはどのようにして生まれるのか—

座長：廣中 直行

公益財団法人東京都医学総合研究所精神行動医学研究分野依存性物質プロジェクト

高田 孝二

東京慈恵会医科大学精神医学講座/帝京大学文学部心理学科

【趣旨・狙い】

脳内報酬系をめぐって、意欲や欲求を、たとえば、嗜好品使用にみられる制御可能な（健常な）欲求と、依存・乱用でみられる制御困難な（病的な）欲求はどのように違うのか、両者は連続線上にあるのか、質的に異なるのか、あるいは、その背景をなす神経学的な要素にはどのようなものがあるのかを、それぞれの専門家からさまざまな角度から論じていただく。

S19-1 意欲、衝動とオレキシン神経

溝口 博之 名古屋大学大学院医学系研究科医療薬学・医学部附属病院薬剤部

S19-2 急性ストレスによるコカイン欲求増大におけるノルアドレナリン神経伝達の役割

金田 勝幸 金沢大院・薬・薬理

S19-3 健常な欲求（適正使用）と病的な欲求（使用障害）の境界

宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座/医療法人社団光生会平川病院

S19-4 脳画像から見た薬物依存と行動嗜癖

高橋 英彦 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科精神行動医学/東京医科歯科大学脳統合機能研究センター

S19-5 脳内報酬系：統合的アプローチの重要性

廣中 直行 東京都医学総合研究所依存性物質プロジェクト

座長：荒川 礼行
齋藤 顕宜

琉球大学医学部システム生理学講座
東京理科大学薬学部薬学科薬理学研究室

【趣旨・狙い】

神経疾患の制御機序や治療戦略を探る際に、動物モデルを用いた橋渡し研究が適している一方、分析方略において対象疾患特有あるいは動物モデル研究に共通した注意点（ピットフォール）が存在する。つまり、動物モデルからヒトの神経疾患の理解へと繋げる道程で、動物種の生物学、候補遺伝子や分子動態の in-vivo 特性、神経回路制御の動物種特異性、認知行動発現の解釈というそれぞれの難所を越えなければならない。本シンポジウムでは、動物モデル研究に立ち向かう演者を集め、それぞれが直面するピットフォールについて話題を共有することで、橋渡し研究の現状と展開可能性を探る。

S20-1 疼痛関連行動を制御する神経回路の解析

小澤 彰彦 Department of Biomedical Science, College of Medicine, Florida Atlantic University

S20-2 カンナビノイド CB2 受容体を持つ二面性：欠損すると末梢神経炎症が増悪する、と誰が言った？

野崎 千尋 早稲田大学理工学術院国際理工学センター Major in Bioscience

S20-3 情動行動制御における δ オピオイド受容体の役割

山田 大輔 東京理科大・薬・薬理

S20-4 双極性障害を伴う遺伝性疾患モデルマウスの研究～*Ntrk1* と *Atp2a2* に着目して

中島 一夫 順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学講座/理化学研究所脳神経科学研究センター精神疾患動態研究チーム

S20-5 家系からの精神疾患研究アプローチ：ある双極性障害家系で見つかったミトコンドリア遺伝子の発現低下

高松 岳矢 琉球大・医・分子細胞生理/琉球大・医・精神

S20-6 自閉症の制御神経回路を分析する際のマウスモデルの有効性：単純な外挿ではない

荒川 礼行 琉球大学大学院医学研究科

腸内細菌と精神疾患～研究の最前線から～The gut microbiota and psychiatric illness～From the front lines of research～

座長：岸本泰士郎

慶應義塾大学医学部ヒルズ未来予防医療・ウェルネス共同研究
講座

功刀 浩

帝京大学医学部精神神経科学講座

【趣旨・狙い】

この10年余り、精神科領域における腸内細菌叢への関心は世界的な高まりをみせている。具体的には、自閉症スペクトラム障害、うつ病・不安症、双極性障害等において腸内細菌叢と各疾患との関連が多く示されてきている。我々は4年前の本学会シンポジウムから2回にわたって、精神科領域における最新の知見をレビューして、今後の展望を議論してきたが、我が国における腸内細菌叢を対象とした当領域の研究は世界と比較して進んでいない。今回も、引き続き同じテーマをとりあげ、うつ病における動物モデルと患者を対象とした最新の研究、自閉症スペクトラム障害を対象としたレビュー、本邦における臨床研究（自閉症スペクトラム障害児を対象とした腸内細菌調査や、気分障害と生活習慣、腸内細菌に関する検証）といった観点から、最新の研究成果を紹介し、今後の展望について議論したい。

S21-1 うつ病動物モデルにおける脳腸相関

酒本 真次 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経病態学教室

S21-2 うつ病患者における腸内細菌の特徴

真田 建史 昭和大学精神医学講座

S21-3 自閉症スペクトラム障害における腸内細菌の最新の知見

田中 有咲 昭和大学附属烏山病院精神神経科

S21-4 自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、その定型発達兄妹児と定型発達児における腸内細菌叢と食事習慣の影響について

黒川 駿哉 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室/不知火クリニック

S21-5 気分障害における腸内細菌の役割

功刀 浩 帝京大学医学部精神神経科学講座/国立精神・神経セ・神経研・疾病三部

クロザピン治療に対する薬剤師の関わりについて考える

座長：和田 智仁
北川 航平

総合心療センターひなが診療技術部薬剤課
地方独立行政法人岡山県精神科医療センター臨床研究部

【趣旨・狙い】

クロザピンは唯一、治療抵抗性統合失調症に保険適応を有する抗精神病薬であるが、副作用マネジメントや血液内科との連携など、普及に対するハードルが高く、諸外国と比較して普及していない現状がある。今回のシンポジウムでは、クロザピン治療に対する薬剤師の関わりについて考えると題し、クロザピンを積極的に使用されているご施設や、安心安全に使用するための副作用マネジメントをされているご施設の先生方をシンポジストとしてお招きした。日々のクロザピンに関する業務を振り返り、シンポジウム当日は、積極的なディスカッションを期待したい。

S22-1 クロザピン治療における多職種連携と地域連携「沖縄モデル」—琉球病院での取り組み

木田 直也 国立病院機構琉球病院

S22-2 クロザピン処方導入の検討と問題点

前田 朋子 医療法人杏和会阪南病院

S22-3 LC/MS/MS を用いたクロザリルおよびその活性代謝物の血中濃度同時測定法の確立

藤澤 豊 鈴鹿医療科学大学薬学部薬学科

S22-4 LC/MS/MS を用いた Clozapine および N-desmethylozapine の血中濃度測定と患者関連解析

佐藤 雅也 社会医療法人居仁会総合心療センターひなが診療技術部薬剤課

S22-5 臨床研究を現場に活かす

北川 航平 地方独立行政法人岡山県精神科医療センター臨床研究部

精神・神経疾患に有効な運動療法の開発と作用機序解明

座長：中川 伸 山口大学大学院医学系研究科高次脳機能病態学講座
陳 冲 山口大学大学院医学系研究科高次脳機能病態学講座

【趣旨・狙い】

精神・神経疾患の薬物療法は一定の効果はあるが、無効な患者が多く存在することや有効であっても日常生活機能面の改善が不十分であることから、非薬物療法などの開発が臨床上喫緊の課題となっている。定期的運動のメンタルヘルスや認知機能をはじめとする様々な脳機能を向上させる効果が近年の研究で多く報告されており、精神・神経疾患に対する治療有効性が大きく期待されている。本シンポジウムでは、運動療法の有効性やその作用機序について、基礎、臨床、またはその両アプローチにおける第一線の専門家をお招きして、運動プログラムの現状の取り組み事例や最新の知見、今後の展望について議論する。

S23-1 マイルドエクセサイズによる海馬記憶能促進効果：動物からヒトへの橋渡し研究

征矢 英昭 筑波大学・体育系・運動生化学/筑波大・体育系・ヒューマン・ハイ・パフォーマンス先端研究センター (ARIHHP)

S23-2 抗うつ作用をもたらす至適運動条件の探索

北 一郎 東京都立大学大学院・人間健康科学研究科

S23-3 運動がもたらす抗うつ効果の分子メカニズム

近藤 誠 大阪公立大学大学院医学研究科脳神経機能形態学

S23-4 有酸素運動は認知症予防に有効か？—1年間の有酸素運動トレーニングが認知機能へ及ぼす影響とそのメカニズムの探索—

樽味 孝 国立研究開発法人産業技術総合研究所/筑波大学/Institute for Exercise and Environmental Medicine (Texas, USA)

S23-5 うつ病に最適な運動療法とは

陳 冲 山口大学大学院医学系研究科高次脳機能病態学講座

治療抵抗性気分障害の本質と展望

座長：加藤 正樹
内田 裕之

関西医科大学精神神経科学講座
慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

【趣旨・狙い】

気分障害の治療において、従来の治療には反応しない“治療抵抗性”の存在は大きな壁となっており、新たな治療法の開発が喫緊の課題である。そのためには、治療抵抗性の本質を多面的に理解し、新規治療法に果敢に取り組むことが必要である。本シンポジウムでは、気分障害の治療抵抗性を取り巻く現状と、それを克服するために現在取り組まれていることを紹介する。その上で、参加者とともに今後の展望を討議したい。

S24-1 治療抵抗性双極性障害について

加藤 忠史 順天堂大学医学部精神医学講座

S24-2 治療抵抗性うつ病に対するケタミン治療

内田 裕之 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

S24-3 新世代の抗うつ薬

櫻井 準 杏林大学医学部精神神経科学教室

S24-4 気分障害における認知機能障害と治療抵抗性の相互作用

住吉 太幹 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部

リピッドネットワークを基盤とした精神と身体の相互連関

座長：竹林 実
青木 淳賢

熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学講座
東京大学大学院薬学系研究科・薬学部衛生化学教室

【趣旨・狙い】

「脂質」は、タンパク質・核酸・糖質と並ぶ生体に必須の成分である。生体膜の基本構成要素や最大のエネルギー源であり、またシグナル分子として多彩な役割を担う生体分子であるが、ゲノムに直接コードされない、不安定性、解析方法が特殊であるなどの理由から、研究が遅れていた歴史がある。しかし、測定技術が発展し、脂肪酸などの様々な生理活性脂質が、食事、生体内での合成、特異的受容体への作用などを介して、炎症・免疫系などの生理機能を発揮することが知られるようになり、多様な疾患との関連が示唆されるようになってきた。本シンポジウムは、ストレス・精神疾患・疼痛などの全身性の精神・神経病態を、脂質やそのメディエーターに焦点を当てて、包括的なネットワークから理解することを目的とする。

S25-1 リピドミクス分析のための質量分析法の開発とその臨床応用

可野 邦行 東京大院・薬・衛生化学

S25-2 うつ病の病態メカニズムにおけるリゾホスファチジン酸受容体の役割

梶谷 直人 熊本大学大学院生命科学研究部附属健康長寿代謝制御研究センター/熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学講座/国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター臨床研究部精神神経科学

S25-3 痛みとリゾホスファチジン酸 (LPA) シグナリング

住谷 昌彦 東京大学医学部附属病院緩和ケア診療部/麻酔科・痛みセンター

S25-4 社会ストレスによる情動変容における生理活性脂質の役割と産生機序

北岡 志保 兵庫医科大学医学部薬理学講座

S25-5 精神疾患の脳脊髄液バイオリソースとリピドミクス解析

服部功太郎 国立精神・神経医療研究センターメディカル・ゲノムセンターバイオリソース部

統合失調症を再考する 2—新規抗精神病薬の動向—

座長：石郷岡 純
 藪内 一輝

CNS薬理研究所
 住友ファーマ株式会社開発本部CNS臨床開発

【趣旨・狙い】

クロルプロマジンが1952年に臨床導入されてから70年が経とうとしている。1990年代に入って、第二世代抗精神病薬の登場で、錐体外路症状は軽減したものの更に忍容性・安全性の高い抗精神病薬が望まれると共に、既存薬では治療できない症状を治療できる抗精神病薬の登場が待たれている。こうして、D2受容体に直接作用しないターゲットの候補化合物の研究開発が進められたが今日まで一つも上市されていない。本シンポジウムでは、まず総論として最新の抗精神病薬開発の動向を述べた後、各論として現在世界的に注目されているTAAR1作動薬SEP-363856とムスカリン受容体作動薬の研究開発の現状を紹介したい。

S26-1 新規抗精神病薬開発の動向と課題

稲田 健 北里大学医学部精神科学

S26-2 Ulotaront (SEP-363856) : a novel TAAR1 agonist for the treatment of schizophrenia

藪内 一輝 住友ファーマ株式会社・開発本部

S26-3 抗精神病薬としてのムスカリン受容体作動薬の開発動向

菊地 哲朗 大塚製薬株式会社医薬品事業部

シンポジウム 27 (BP 企画シンポジウム) 11月5日(土) 16:30~18:30 第1会場(コスモス)

最先端の精神医学研究は精神疾患の診断法の開発にどこまで迫れるか？

座長：岡本 泰昌
 橋本 亮太

広島大学大学院医系科学研究科精神神経医学
 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

【趣旨・狙い】

精神科の診断基準は、患者の症状と経過によって定義されており、客観的・科学的な基準は取り入れられていない。そのため診断の一致率は十分に高いとは言えず、現在の治療でよくなる患者は30-50%と言われていた。客観的・科学的な診断を取り入れることができれば、診断の一致率が上がり、患者により適切な治療ができるようになることが期待されているが、ICDやDSMなどの診断基準には取り入れられていない。本シンポジウムでは、この問題について生物学的精神医学がどこまで迫っているのかを、最先端の研究者が、研究成果を如何に臨床現場に応用するかという観点で、それぞれの講演者の研究だけでなく、その分野の現状と将来について概説する。

S27-1 精神疾患の診断法の開発はどのように行うのか？

橋本 亮太 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

S27-2 ポリジェニックモデルから考える精神疾患の診断

池田 匡志 藤田医科大学医学部精神神経科学

S27-3 頻度の稀なバリエーションに基づいた精神疾患の診断

久島 周 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学分野/名古屋大学医学部附属病院ゲノム医療センター

S27-4 精神疾患と脳構造画像：脳構造画像で精神疾患は分類できるのか？

根本 清貴 筑波大学医学医療系精神医学

S27-5 脳機能画像手法は精神疾患の診断に使えるのか？

新里 輔鷹 広島大学大学院医歯薬保健学研究科(医)医学講座精神神経医学

ストレス/精神疾患と細胞老化

座長：泉 剛
菱本 明豊

北海道医療大学薬学部薬理学(臨床薬理毒理学)
横浜市立大学精神医学教室

【趣旨・狙い】

テロメアは細胞寿命の決定因子であり、老化により短縮する。がんや様々な慢性疾患におけるテロメアの異常が知られている。本シンポジウムでは、精神・神経疾患を細胞老化の観点から行った研究を紹介し(朴)、次いで自殺者検体(大塚)やうつ病動物モデル(鹿内)におけるテロメア研究について紹介する。そして、がん細胞のテロメア異常を細胞老化とマイクロRNAの機能から検討した研究を紹介する(田原)。さらに鉄代謝という新たな観点から細胞老化を追求している研究を紹介する(諸石)。以上により、老化、がん、ストレスにおける個体・細胞レベルの異常に何か共通する機序はないか、あるいは相違点は何かという問題について考えたい。

S28-1 精神・神経疾患における細胞老化関連分子の役割

朴 秀賢 熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学講座

S28-2 ゲノム/エピゲノム解析からみた自殺と細胞老化

大塚 郁夫 神戸大学大学院医学研究科精神医学分野

S28-3 うつ病モデル動物におけるテロメア

鹿内 浩樹 北海道医療大学薬学部薬理学講座(臨床薬理毒理学)/北海道医療大学先端研究推進センター

S28-4 細胞老化・ストレスにおけるテロメア・マイクロRNA

田原 栄俊 広島大学・大学院医系科学研究科・細胞分子生物学研究室

S28-5 鉄代謝の変容と細胞・組織への影響

諸石 寿朗 熊本大・医・シグナル代謝医学講座/熊本大・健康長寿代謝制御研究センター

座長：岩本 和也
高田 篤熊本大学大学院生命科学研究部分子脳科学講座
理化学研究所脳神経科学研究センター分子精神病理研究チーム

【趣旨・狙い】

受精後に生じるゲノム上の体細胞変異は、遺伝的な変異に加えて疾患発症リスクの上昇や病態の重篤化などに関連していると考えられている。信頼性の高い体細胞変異の検出は高度なバイオインフォマティクス技術の適用が必要であり、さらに脳組織では、発生段階、脳領域、細胞種などについて体細胞変異の特性を明らかにし、表現型への影響を検証する必要がある。本シンポジウムでは、体細胞変異研究の新規技術を開発している研究者、また、精神神経疾患における体細胞変異解析を進めている研究者から、現在までの成果と課題、展望をお話し頂き、体細胞変異研究の重要性について理解を深めたい。

S29-1 体細胞変異と精神神経疾患

高田 篤 理化学研究所脳神経科学研究センター

S29-2 血中体細胞モザイクは精神疾患と関連するのか

寺尾知可史 理研ゲノム解析応用研究チーム

S29-3 統合失調症患者死後脳を用いたシングルセルレベルでの LINE-1 挿入部位の解析

文東 美紀 熊本大学大学院生命科学研究部分子脳科学講座

S29-4 ゲノム編集技術を用いた体細胞遺伝子操作

鈴木啓一郎 大阪大学高等共創研究院/大阪大学大学院基礎工学研究科/大阪大学大学院生命機能研究科

オピオイド鎮痛薬の不適切使用を予防し適正使用に繋げるための基礎と臨床からの最新の知見

座長：井関 雅子 順天堂大学医学部麻酔科学・ペインクリニック講座
森 友久 星薬科大学薬理学研究室

【趣旨・狙い】

薬物依存や誤用は、患者の生活の質を保ち社会の秩序を守るために、議論すべきテーマである。欧米では疼痛緩和目的に処方されたオピオイド鎮痛薬、特に強オピオイドへの不適切使用(依存、誤用)が社会的問題となっている。本邦の慢性疼痛罹患率は30%であり、生命予後の改善から様々な痛みを抱えるがんサバイバーが増加しており、オピオイド処方の増加が予想される。今後本邦においてもオピオイドの不適切使用の予防を目指すとともに、有用な患者への適正使用に繋げていく必要がある。そこで臨床と基礎の両面からオピオイド不適切使用のリスク因子を明らかにして、低減法を考案することが望まれる。オピオイド依存の普遍性と特殊性、オピオイド不適切使用の現状、臨床と基礎における依存リスクと予防手段についての新薬の開発も含めた知見を深めるためのシンポジウムである。

S30-1 医原性症候群としてのオピオイド使用障害

山口 重樹 獨協医科大学医学部麻酔科学講座

S30-2 難治性疼痛及び鎮痛・薬物依存に関連する遺伝子多型

西澤 大輔 東京都医学総合研究所依存性物質プロジェクト(精神行動医学研究分野)

S30-3 人はなぜ依存症になるのか

松本 俊彦 国立精神・神経医療研究センター

S30-4 依存リスクを回避した新規オピオイド鎮痛薬開発とその応用

南雲 康行 国立がん研究センター研究所・がん患者病態生理研究分野/筑波大学・国際統合睡眠医科学研究機構

S30-5 オピオイドで痛みは強まる—オピオイド鎮痛の過信を解くためのエビデンス開示—

金井 昭文 北里大学医学部新世紀医療開発センター・疼痛学

S30-6 オピオイドの生体機能への影響：中枢・末梢 μ オピオイド受容体の包括的機能解析

濱田 祐輔 星薬科大・薬・薬理/国立がん研セ・研・がん患者病態生理

座長：入谷 修司
河上 緒

医療法人静心会桶狭間病院藤田こころケアセンター
順天堂大学医学部精神医学/公益財団法人東京都医学総合研究所
脳・神経科学研究分野

【趣旨・狙い】

精神神経疾患の病因病態解明において、研究リソースとしての脳組織の重要性はいうまでもない。しかし、とくに精神疾患の脳リソースは様々な要因から収集・蓄積することが難しく、研究者への要望や需要に十分に答えきれておらず、欧米のブレインバンクに依拠することも多かった。この数年来、AMEDの支援によって日本版精神科ブレインバンクの拠点構築が整備されつつある。本シンポジウムは、精神科ブレインバンク活動による脳リソースをどのように研究に活かされたかを論じていただき、ブレインバンクのあらたな可能性を共有したい。

S31-1 神経病理から考える内因性精神疾患の病態

鳥居 洋太 名古屋大学医学部附属病院精神科

S31-2 統合失調症死後脳で見られる脳組織の構造変化

水谷 隆太 東海大・工

S31-3 精神疾患モデルマウスの確立にむけた基礎研究におけるヒト死後脳の活用

新田 淳美 富山大学学術研究部薬学・和漢系薬物治療学研究室

S31-4 神経回路に着目した精神科における神経病理学的探索研究

河上 緒 順天堂大学医学部精神医学講座/東京都医学総合研究所認知症プロジェクト

S31-5 精神科ブレインバンクにおける神経病理学の役割

吉田 眞理 愛知医科大学加齢医科学研究所

次世代の精神科薬剤師を育成するために～実務実習における学生教育も含めて～

座長：三輪 高市
黒沢 雅広

鈴鹿医療科学大学薬学部薬学科・大学院薬学研究科
昭和大学薬学部病院薬剤学講座/昭和大学附属烏山病院薬局

【趣旨・狙い】

現在の複雑な社会構造の中、人々の生活を安定維持するために精神科医療の重要性は急速に高まっており、それにつれて精神科薬剤師個々の資質は徐々に向上してきている。一方、後進の育成については、大学、病院、保険薬局のそれぞれ現場で精神科の教育は決して十分とは言えない。薬学教育でも、実務実習をはじめとして精神科教育に十分な時間を割いておらず、指導者も少ない。精神科の認定・専門薬剤師の人数は頭打ちになっており、精神科に関わる薬剤師を増やすことや精神科の教育を広げていくことは、精神科薬剤師全体の課題である。本シンポジウムでは、後進育成における問題点や将来像について、現在の取り組みなどを交えて考えていきたい。

S32-1 薬剤師に聞いてみよう～薬剤師が一人ひとりに向き合うために～

本田 顕子 参議院議員

S32-2 精神医療実習の学習効果

黒沢 雅広 昭和大学附属烏山病院

S32-3 精神科単科病院における実務実習と学生教育について

佐藤 康一 社会福祉法人桜ヶ丘社会事業桜ヶ丘記念病院

S32-4 保険薬局における精神科薬剤師の羅針盤

栗原 正亮 ここみ薬局

座長：野村 淳
谷口 将之

神戸大学大学院医学研究科生理学・細胞生物学講座生理学分野
神戸大学大学院・医学研究科・薬理学分野

【趣旨・狙い】

神経発達症および精神疾患は神経シナプスにリスク遺伝子が集積している。しかしこれら疾患はシナプスに発現する遺伝子のみが臨床表現型に影響を与えるとは考えにくく、遺伝子変異を有する様々な細胞が個々の機能を変化させながら、複雑な細胞間コミュニケーションを通じてヘテロな疾患表現型を形成しているものと考えられる。本セッションではセルタイプ特異的解析やシングルセル解析から得られた最新の研究成果を共有したい。

S33-1 シングルセル解析による自閉症リスク因子の同定

野村 淳 神戸大院・医・生理/理研 BSI

S33-2 神経発達症・統合失調症の関連領域である 1q21.1 コピー数多型がヒト ES 細胞由来神経オルガノイドの細胞表現型に与える影響

野村 芳子 帝京大学医学部精神神経科学講座

S33-3 動物モデルの 1 細胞解析から迫る双極性障害関連神経回路の解析

島 康之 理化学研究所・脳神経科学研究センター

S33-4 ストレスによるミクログリアの転写・エピゲノム変化の全貌

谷口 将之 神戸大学大学院医学研究科薬理学分野

S33-5 マーモセット自閉症モデルとヒト自閉症サブタイプおよび 15q 重複症候群のトランスクリプトームの類似性

渡邊 恵 国立精神・神経医療研究センター微細構造研究部

シンポジウム 34

11月6日(日) 8:50~10:50 第6会場(706)

動物情動解析の新手法

座長：大村 優
溝口 博之北海道大学大学院医学研究院薬理学分野神経薬理学教室
名古屋大学大学院医学系研究科医療薬学・医学部附属病院薬剤部

【趣旨・狙い】

実験動物を用いた基礎研究から臨床研究・応用へとつなげるためには、動物の情動を評価する手法と疾患モデルを洗練させる必要がある。本シンポジウムでは、これらの問題に取り組む研究者らに新手法を用いた研究成果を共有してもらった上で、それらの手法の利点と欠点、そして導入するにあたっての注意点などを議論する。大村がマウスのスクロース報酬に対する舌反応解析と機械学習による表情解析法を、兎田がマウスの瞳孔解析法を、中武が同胞マウスの社会的敗北場面を目撃を利用した心理社会的ストレスモデルを、山下が DeepLabCut などを用いた洞毛や鼻の運動の解析法を紹介する。

S34-1 マウス報酬応答の舌反応・表情解析

大村 優 北海道大学大学院医学研究院薬理学分野神経薬理学教室

S34-2 マウスの瞳孔計測による古くて新しい行動分析

兎田 幸司 慶應・文・心理

S34-3 視覚情報を利用したマウスの新規ストレスモデル

中武 優子 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神薬理研究部

S34-4 報酬に関連したマウスの洞毛・鼻運動とその神経機構

Takayuki Yamashita Department of Physiology, Fujita Health University School of Medicine

シンポジウム 35 (NP 企画シンポジウム) 11月6日(日) 13:20~15:20 第1会場(コスモス)

産学官連携・国際連携で中枢神経作用薬開発危機を克服できるか？

座長：菊地 哲朗
池田 和隆大塚製薬株式会社医薬品事業部
公益財団法人東京都医学総合研究所精神行動医学研究分野依存性物質プロジェクト

【趣旨・狙い】

精神・神経疾患は、甚大な社会経済的損失を引き起こしており、根本的治療法の開発が強く求められている。しかし、欧米の巨大製薬企業の多くは、むしろ中枢神経作用薬の研究開発から撤退しており、精神・神経疾患患者の治療が行き詰まる危機に直面している。この危機を打開するために、多くの関係機関と関係者が取り組んでいるが、本シンポジウムではその中でも、国立精神・神経医療研究センターでの具体的な取り組み、製薬企業での問題・動向の分析と打開策の提案、国の健康医療戦略としての対策状況と今後の展開、学会等での活動を介した対応策と今後の展望を紹介する。参加者との議論を基に、中枢神経作用薬開発危機克服への戦略を練る。

S35-1 ナショナルセンターとしての研究開発の基盤整備による克服

中込 和幸 国立精神・神経医療研究センター

S35-2 産業界における問題意識と世界動向を踏まえた克服への取り組み

原田 秀幸 住友ファーマ株式会社

S35-3 『健康・医療戦略』に基づく産学官連携による基礎から実用化まで一貫した研究開発

笠松 淳也 内閣府健康・医療戦略推進事務局

S35-4 国際学会、学会連合、学術会議等での連携促進による克服

池田 和隆 東京都医学研・精神行動医学

精神疾患患者の地域生活を支える地域連携の現状と課題

座長：竹内 尚子
中田 裕介トライアドジャパン株式会社
合資会社中田薬店ゆう薬局

【趣旨・狙い】

精神科医療の場は入院医療中心から地域生活中心へとシフトしている。

精神疾患患者の地域生活においては「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」が示されており、多職種連携のもとで患者を支援することが求められる。多職種連携の実現にむけて、現場や職種ごとの立場や考えを理解することも欠かせないと思われる。

本シンポジウムでは、様々な職種（医師・薬剤師・精神保健福祉士・ケアマネジャー）の視点から多職種連携の現状や課題について忌憚のない意見をいただき、ディスカッションを行いたい。

S36-1 精神科医からみた精神疾患患者の地域生活を支える地域連携の現状と課題

古郡 規雄 獨協医科大学精神神経医学講座

S36-2 精神疾患患者の早期再入院を防ぐための多職種連携

和田 智仁 社会医療法人居仁会総合心療センターひなが

S36-3 アルテ薬局における地域連携の現状と参画への検討

鈴木 弘道 アルテ薬局

S36-4 地域連携における精神保健福祉士の役割と課題

牛場 裕治 福井県立大学看護福祉学部

S36-5 住み慣れた地域で暮らしていくために精神障がいと介護をつなぐ

野中 康代 須田病院居宅介護支援事業所

精神疾患研究におけるヒト iPSC 研究最前線

座長：中澤 敬信

東京農業大学生命科学部バイオサイエンス学科動物分子生物学
研究室

林(高木) 朗子

理化学研究所脳神経科学研究センター多階層精神疾患研究チーム

【趣旨・狙い】

精神疾患の発症メカニズムはいまだに解明されておらず、一日も早い病態の解明が待たれる。疾患の病因解明・治療法開発のためには、患者の病的脳組織を用いた研究が望ましいが、倫理的あるいは技術的な問題により、新鮮なヒトの脳を入手することは困難である。そこで、精神疾患に関連するヒト iPSC 細胞株を樹立することができれば、生体では入手が困難なヒト神経細胞の作製が可能となり、従来にない観点から精神疾患研究が可能となる。本シンポジウムでは、分子生物学的手法や電気生理学的手法を駆使した iPSC 細胞研究の最前線を紹介する。総合討論では iPSC 細胞技術の有用性やこれから克服すべき問題にどのように挑戦するかについて活発に議論したい。

S37-1

bHLH 型転写因子発現による神経分化プラットフォームを用いた神経疾患解析へのアプローチ

石川 充 慶應大・医・生理学

S37-2

エフェクトサイズの大きな責任分子シグナルに立脚した動物モデルおよび iPSC 細胞研究

林(高木)朗子 理研・CBS・多階層精神疾患研究チーム

S37-3

iPS 細胞技術及び疾患モデルマウスを用いた精神疾患の分子病態研究

中澤 敬信 東京農業大学生命科学部バイオサイエンス学科

S37-4

精神疾患リスクゲノム変異を起点とした多様な試料を用いた病態解明

尾崎 紀夫 名古屋大学大学院医学系研究科精神疾患病態解明学

統合失調症皮質下体積特徴を起点とした双方向トランスレーショナル研究

座長：小池 進介
 笹林 大樹

東京大学心の多様性と適応の連携研究機構
 富山大学学術研究部医学系神経精神医学講座

【趣旨・狙い】

精神疾患脳画像研究により、統合失調症では病初期から淡蒼球増大が認められることが分かった。現在、この淡蒼球増大の神経基盤を明らかにする双方向トランスレーショナル研究が進められている。柳下は、ドーパミン D1、D2 受容体の機能分化の解明を起点として、ドーパミン系ストレス脆弱性モデルマウスを用いた新規サリエンス障害マウスモデルの淡蒼球増大について発表する。田中は、L-ドパ誘発性ジスキネジアモデルマウスで見られる淡蒼球増大の微細形態変化を発表する。小松は、ストレス脆弱性モデルのマーモセットへの応用と統合失調症発症モデルへの適用可能性について発表する。久保田は、精神疾患 MRI、PET 研究を通じて、統合失調症皮質下構造と機能変化について、トランスレーショナル研究の推進について発表する。本シンポジウムにより、統合失調症双方向トランスレーショナル研究がどのように進められるべきかを議論していきたい。

S38-1 ドーパミン系ストレス負荷による新規統合失調症の発症モデル

柳下 祥 東京大院・医・構造生理

S38-2 大脳基底核体積が増加する病態の解剖学的解析

田中 謙二 慶應義塾大学医学部・先端研・脳科学

S38-3 ドーパミン系ストレス負荷に伴う統合失調症発症仮説のマーモセットへの適用可能性

小松三佐子 東京工業大学科学技術創成研究院・バイオインタフェース研究ユニット/理化学研究所脳神経科学研究センター・高次脳機能分子解析チーム

S38-4 線条体ドーパミン機能に着目した統合失調症の病態理解—PET 研究の知見を中心に—

久保田 学 京都大学医学部附属病院精神科神経科

日本臨床精神神経薬理学会 第22回臨床精神神経薬理学セミナー

日本臨床精神神経薬理学会 第22回臨床精神神経薬理学セミナー 11月6日(日) 8:50~10:50 第3会場 (601)

司会：嶽北 佳輝
谷 英明

関西医科大学医学部精神神経科学講座
慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

【趣旨・狙い】

日本臨床精神神経薬理学会専門医制度委員会は、臨床精神神経薬理学に関する優れた学識と高度の技術及び倫理観を備えた臨床精神神経薬理学専門医を養成し、良質な医療を提供することを目的に「臨床精神神経薬理学セミナー」を開催してまいりました。第22回となる今回は「薬物相互作用」、「クロザピン」、「物質関連障害」がテーマです。

専門医申請及び更新を目指す医師に限らず、生涯学習の一環として受講を希望される会員(当日会員も可)はどなたでもご参加頂けます。受講された方には専門医申請及び更新の際、単位として必要となる受講証が発行されます。奮ってご参加下さいませよう、お願い申し上げます。

CNS-1 精神科治療における薬物相互作用

福井 直樹 新潟大学医学部医学教育センター/新潟大学医歯学総合病院精神科

CNS-2 クロザピン治療の実際

菊池 結花 ハートケアクリニックおおまち

CNS-3 物質関連障害の回復支援と薬物療法の役割

小林 桜児 神奈川県立精神医療センター依存症診療科

日本臨床精神神経薬理学会 臨床試験—倫理教育セミナー

日本臨床精神神経薬理学会 臨床試験—倫理教育セミナー 11月6日(日) 13:20~15:20 第3会場 (601)

司会：井上 猛 東京医科大学精神医学分野
鈴木雄太郎 医療法人敬愛会末広橋病院

【趣旨・狙い】

本セミナーでは、2人の演者に臨床試験と倫理についてご講演いただきます。東京医科大学 生命倫理学(医学論理学)教室 倉田 誠先生には「医学系研究に関する倫理審査」についてご講演いただきます。医学系研究の倫理審査は年々複雑になり、申請に苦勞することが多いと思いますが、倫理審査のポイントについてご講演いただきます。慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室 内田 裕之先生には「特定臨床研究の進め方」についてご講演いただきます。先生が現在進めている臨床研究について遂行に苦勞する点、充実感を感じる点についてご講演いただきます。

CLETS-1 医学系研究に関する倫理審査のポイント 人文・社会科学の有識者としての立場から

倉田 誠 東京医科大学医学部医学科

CLETS-2 特定臨床研究の進め方：多くの苦勞とそれを上回る充実感

内田 裕之 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

スポンサードシンポジウム

スポンサードシンポジウム 1

11月4日(金) 8:40~10:40 第2会場(オリオン)

共催: 帝人ファーマ株式会社

精神疾患治療における TMS (経頭蓋磁気刺激) 療法のこれからの考える～基礎(研究)から臨床まで～

座長: 高橋 英彦 東京医科歯科大学精神科

【趣旨・狙い】

rTMS(反復経頭蓋磁気刺激)療法は、2008年に米国で初めてうつ病患者の治療としてFDA承認を受け、日本でも2019年6月に保険収載され、うつ病の治療選択肢が拡大した。基礎研究によって見出された様々な発見を応用することにより、rTMS療法はこの10数年で大きく様変わりした。日本では保険収載から3年が経過し、臨床への普及は拡がりつつある一方、有効性や安全性などの基礎情報や臨床状況については、まだまだ十分に理解されているとは言い難い。本シンポジウムでは、TMSの基礎・臨床の両側面に精通された医療者から、基礎で蓄積された知見を交え、その臨床的意義、治療戦略の展望などについてご発表いただき、全体討論にてさらに理解を深めたい。

SS1-1 rTMSによるうつ病の認知機能改善効果とそのメカニズム

立石 洋 佐賀大学医学部附属病院精神神経科

SS1-2 治療抵抗性うつ病に対する TMS 療法の縦断データ解析による治療反応予測と神経生物学的基盤の層別化

野田 賀大 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

SS1-3 熊本大学病院における rTMS の立ち上げ経験から考えたこと

朴 秀賢 熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学講座

スポンサードシンポジウム 2

11月4日(金) 13:10~15:10 第2会場(オリオン)

共催: 吉富薬品株式会社/共和薬品工業株式会社

双極性障害における患者プロフィールに基づく治療の留意点

座長: 寺尾 岳 大分大学医学部精神神経医学講座

【趣旨・狙い】

双極性障害は抑うつ症状が受診に繋がりがやすく、期間が長いこともあり、うつ病と診断されやすく、診断がつきにくいことが知られています。双極性障害の治療の中心となる薬物療法においては、対象となる患者プロフィールや病相に応じた薬剤の使い分け、躁転やラピッド・サイクラー化など、様々な薬剤使用上の問題点が存在します。このセッションでは患者プロフィールを含む様々な視点から、双極性障害の治療の留意点について、臨床薬理のエキスパートから講演頂いた後、具体的な臨床疑問についてディスカッションの時間を設け、各演者から意見を述べて頂きます。

SS2-1 双極性障害を有する妊産婦の薬物療法

菊地 紗耶 東北大学病院精神科

SS2-2 双極性障害診療アップデート

櫻井 準 杏林大学医学部精神神経科学教室

SS2-3 スーパー救急病棟における双極性障害薬物療法

山田 浩樹 昭和大学横浜市北部病院/昭和大学医学部精神医学講座

抗精神病薬による新たな治療戦略とアセナピンの位置づけ

座長: 宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座/光生会平川病院
 稲田 健 北里大学医学部精神科学

【趣旨・狙い】

第2世代抗精神病薬は登場から26年が経過し、近年の統合失調症の病態は軽症化、不顕性化、非典型化が特徴となっている。また、従来の統合失調症治療の反省から、パーソナルリカバリーを目指し、過剰な鎮静を避け、治療抵抗例を作らないなどの基本姿勢が広く受け入れられるようになってきた。このような新たな治療戦略を受けて、本シンポジウムでは、統合失調症の薬物療法を、①非鎮静系抗精神病薬、②鎮静系抗精神病薬、③持効性注射薬(LAI)の3つの極から再考する。その意味では、現在は、第2世代抗精神病薬の本来のコンセプトを活かす時期に来ているといえる。その中で、アセナピン舌下錠の位置づけを改めて考えてみたい。

SS3-1 統合失調症薬物治療ガイドラインとアセナピン

稲田 健 北里大学医学部精神科学

SS3-2 非鎮静系抗精神病薬としてアセナピンは使えるのか

大下 隆司 医療法人社団邦秀会代々木の森診療所

SS3-3 鎮静系抗精神病薬とアセナピン

宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座/光生会平川病院

SS3-4 統合失調症治療における asenapine の有用性を持効性注射剤の視点から考える

嶽北 佳輝 関西医科大学医学部精神神経科学講座

スポンサーシンポジウム 4

11月5日(土) 8:40~10:40 第2会場(オリオン)

共催:住友ファーマ株式会社メディカルフェアーズ部

当事者が訴える症状の奥にある共通項を見立てる一日常生活機能を改善するための治療へー

座長:久住 一郎 北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室
 中込 和幸 国立精神・神経医療研究センター

【趣旨・狙い】

統合失調症の認知機能障害は精神症状とは独立した中核的症候とされ、社会機能的転帰を予測するため、効果的な治療方法の開発が期待されている。日常臨床では認知機能障害に対して薬物療法と認知リハビリテーション(NEAR)など心理社会的治療法との併用が推奨されているが課題も多い。そこで臨床医が遭遇する認知機能障害を如何に見つけ出し、当事者の治療意欲を高め、個別化医療の成功に繋げることが出来るかどうかについて実践的な解決策を解説する。

さらに早期精神病における認知機能障害への介入により疾患トラジェクトリーを変えるための課題を提示し、その解決に向けてデジタル技術を使った医療の可能性や将来展望についても議論したい。

SS4-1 認知機能障害を意識した統合失調症臨床

橋本 直樹 北海道大学大学院医学研究院神経病態学講座精神医学教室

SS4-2 Cognitive Interventions for Severe Mental Illness : What is the Evidence and How do We Implement in Practice

Alice Medalia Department of Psychiatry, Columbia University, USA

SS4-3 Early Psychosis : Challenges and Opportunities

John M. Kane Department of Psychiatry, The Donald and Barbara Zucker School of Medicine at Hofstra/Northwell, U.S.A.

スポンサーシンポジウム 5

11月5日(土) 13:10~15:10 第2会場(オリオン)

共催:田辺三菱製薬株式会社 育薬本部/ヤンセンファーマ株式会社 メディカルフェアーズ本部

あらためて考えたい遅発性ジスキネジアの本質と、これからに向けて

座長:渡邊 衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室

【趣旨・狙い】

抗精神病薬による錐体外路症状のうち、長期投与によって一定の頻度で発症する遅発性ジスキネジア(TD)は、一旦発症すると対処が難しい副作用である。したがって、日々の診療で常に留意する必要がある。

2022年現在、日米英ガイドラインに共通して記載されている対処法は、原因薬剤の減量と中止、および第二世代抗精神病薬への変薬である。

本邦における新たなTD治療の選択肢として、バルベナジンが加わった。本シンポジウムではTDの疾病概念、診断、および治療の観点から最新の知見をレビューする。患者の意思を尊重した上で、どんな治療を行うべきかなど、本シンポジウムをこれからのTD治療戦略について考える機会としたい。

SS5-1 遅発性ジスキネジアの疫学と病態

竹内 啓善 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

SS5-2 遅発性ジスキネジアの診断や鑑別のポイント

堀口 淳 島根大学名誉教授

SS5-3 遅発性ジスキネジア(TD)治療のこれからを考える

堤 祐一郎 医療法人永寿会恩方病院

スポンサーシンポジウム 6

11月5日(土) 16:30~18:30 第2会場(オリオン)

共催: 塩野義製薬株式会社 メディカルアフェアーズ部/武田薬品工業株式会社 ジャパンメディカルオフィス

『注意欠如・多動症-ADHD-の診断・治療ガイドライン(第5版)』によるADHDの診断と治療

座長: 齊藤万比古
飯田 順三

恩賜財団母子愛育会愛育相談所
南風会万葉クリニック子どものこころセンター絆

【趣旨・狙い】

注意欠如・多動症-ADHD-の診断・治療ガイドラインは、最新版である第4版が刊行されてからおよそ6年が経過し、注意欠如・多動症(ADHD)診療を取り巻く状況は大きく変化しました。また、ADHDに関する疾患認知も進みつつあり、ADHDは近年大きく注目を集めるようになった。こうした大きな状況の変化に対応したADHD診療の指針を示すべく、ADHD診療に第一線で携わる執筆者陣がまとめた診断・治療ガイドラインの改訂版(第5版)が発刊される。その改訂のポイントを執筆者から直接解説していただき、改訂版の内容を広く先生方に周知する。

SS6-1 ADHDの診断・治療ガイドラインにおける診断・評価

太田 豊作 奈良県立医科大学医学部看護学科人間発達学

SS6-2 成人期ADHDの診断と治療

根来 秀樹 信貴山病院ハートランドしげさん

SS6-3 注意欠如・多動症治療の臨床エビデンスと本邦ガイドライン

岡田 俊 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部

スポンサーシンポジウム 7

11月6日(日) 8:50~10:50 第2会場(オリオン)

共催: 大塚製薬株式会社 メディカル・アフェアーズ部

統合失調症および双極性障害の再発予防を考える

座長: 村井 俊哉
松尾 幸治

京都大学大学院医学研究科精神医学
埼玉医科大学医学部精神医学

【趣旨・狙い】

統合失調症および双極性障害は慢性経過を辿る疾患であり、治療継続が低いことから再発のリスクが高い疾患である。そして再発を繰り返す度に、日常および社会機能の低下や再発のサイクルが早くなること、薬物治療反応性の低下等の問題があるため、両疾患ともに社会復帰を図るうえで再発予防は重要な臨床課題となっている。本セッションでは各演者より、疾患の病態や治療の面から再発予防の意義について、ならびに再発予防のための臨床上の課題や工夫について紹介して頂く。

SS7-1 Shared Decision Making—Evidence を実臨床に活かすために—

橋本 直樹 北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室

SS7-2 統合失調症の維持期治療戦略

竹内 啓善 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

SS7-3 双極性障害の再燃・再発抑制を考える

松尾 幸治 埼玉医科大学医学部精神医学

SS7-4 双極性障害患者の安定した就労について

近野 祐介 産業医科大学医学部精神医学教室

うつ病における Emotional Blunting を考える

座長: 岩田 仲生 藤田医科大学医学部精神神経科学講座

【趣旨・狙い】

抗うつ薬によるうつ病治療中に出現する Emotional Blunting と呼ばれる感情面の問題が複数の先行研究によって指摘されている。海外からは、抗うつ薬による治療を受けているうつ病患者のうち 46% に Emotional Blunting が認められたと報告されている。Emotional Blunting は抗うつ薬治療を中止する主要な理由になりうることも示されており、この問題に関する実態を把握することはうつ病診療における臨床課題の解決に有益であろう。

本シンポジウムでは、国内での Emotional Blunting に関する調査を一部紹介いただくとともに、国内外の専門家とうつ病治療における Emotional Blunting の問題についての議論を深める。

SS8-1

Emotional Blunting in Patients with Depression and its Correlations with Overall Functioning, Cognitive Performance, Depressive Symptoms, Quality of Life, Motivation and Energy

Andrea Fagiolini Department of Psychiatry, University of Siena School of Medicine, Siena, Italy

SS8-2

Emotional Blunting は本当に存在するのか？

伊賀 淳一 愛媛大学大学院精神神経科学講座

SS8-3

うつ病臨床における Emotional Blunting の意味することとは？新しい概念を導入することの是非を問う

菊地 俊暁 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

ランチオンセミナー

ランチオンセミナー 1 11月4日(金) 12:00~13:00 第1会場(コスモス)

共催:住友ファーマ株式会社

座長:内田 裕之 慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

LS1 統合失調症の薬物療法~今出来ることと今後の展望~

嶽北 佳輝 関西医科大学医学部精神神経科学講座

ランチオンセミナー 2 11月4日(金) 12:00~13:00 第2会場(オリオン)

共催:大塚製薬株式会社 メディカル・アフェアーズ部

座長:木下 利彦 関西医科大学精神神経科学講座

LS2 治療抵抗性統合失調症の病態と治療—ドパミン過感受性精神病の視点から—

伊豫 雅臣 千葉大学大学院医学研究院精神医学

ランチオンセミナー 3 11月4日(金) 12:00~13:00 第3会場(601)

共催:ヴィアトリス製薬株式会社/住友ファーマ株式会社

座長:白川 治 医療法人尚生会湊川病院精神科/神戸大学客員教授

LS3 ストレス社会と脳内炎症

岩田 正明 鳥取大学医学部脳神経医学講座精神行動医学分野

ランチオンセミナー 4 11月4日(金) 12:00~13:00 第4会場(606)

共催:田辺三菱製薬株式会社 育薬本部/ヤンセンファーマ株式会社 メディカルアフェアーズ本部

不随意運動だけではない! 遅発性ジスキネジアと関連する因子

座長:中込 和幸 国立精神・神経医療研究センター

LS4-1 遅発性症候群としての遅発性ジスキネジアと課題:精神症状との関係

金原 信久 千葉大学社会精神保健教育研究センター

LS4-2 統合失調症治療におけるTDとQOL、認知機能、社会生活への影響

堀 輝 福岡大学医学部精神医学教室

ランチオンセミナー 5 11月4日(金) 12:00~13:00 第5会場(701)

共催:エーザイ株式会社

座長:片桐 直之 東邦大学医学部精神神経医学講座

LS5 精神科薬物療法の出口戦略ガイドラインと Decision Aids

三島 和夫 秋田大学大学院医学系研究科精神科学講座

ランチョンセミナー 6 11月4日(金) 12:00~13:00 第6会場(706)

共催：株式会社ヤクルト本社 中央研究所

座長：岸本泰士郎 慶應義塾大学医学部ヒルズ未来予防医療・ウェルネス共同研究講座

LS6 精神疾患と腸内フローラ：新たな治療の可能性とメカニズム

功刀 浩 帝京大・医・精神神経科/国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第三部

ランチョンセミナー 7 11月4日(金) 12:00~13:00 第7会場(スバル)

共催：日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社 医薬開発本部

座長：村井 俊哉 京都大学大学院医学研究科精神医学

LS7 統合失調症イメージングバイオマーカーの最前線

高橋 英彦 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 精神行動医科学

ランチョンセミナー 8 11月5日(土) 12:00~13:00 第1会場(コスモス)

共催：武田薬品工業株式会社/ルンドベック・ジャパン株式会社

座長：井上 猛 東京医科大学精神医学分野

LS8 Resistant Depression : Concept, Insight and Treatment.

Joseph Zohar Post-Trauma Center, Sheba Medical Center, Israel ; Tel Aviv University, Israel

ランチョンセミナー 9 11月5日(土) 12:00~13:00 第2会場(オリオン)

共催：ニプロ株式会社

座長：松本 恭典 東京医科大学病院メンタルヘルス科

LS9 双極性障害の疾患概念と薬物療法

仁王進太郎 東京都済生会中央病院精神科(心療科)

ランチョンセミナー 10 11月5日(土) 12:00~13:00 第3会場(601)

共催：持田製薬株式会社/田辺三菱製薬株式会社/吉富薬品株式会社

座長：松永 寿人 兵庫医科大学精神科神経科学

LS10 社交不安症の診断と治療

朝倉 聡 北海道大学保健センター・北海道大学大学院医学研究院精神医学教室

ランチョンセミナー 11

11月5日(土) 12:00~13:00 第4会場(606)

共催: ヤンセンファーマ株式会社

座長: 岩田 正明 鳥取大学医学部脳神経医学講座精神行動医学分野

LS11 精神科救急医療ガイドラインの最新状況とLAIの位置づけ

八田耕太郎 順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学/順天堂大学医学部附属練馬病院メンタルクリニック

ランチョンセミナー 12

11月5日(土) 12:00~13:00 第5会場(701)

共催: 大塚製薬株式会社

座長: 内田 裕之 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

LS12 中長期的視野に立った統合失調症薬物療法と治療反応に関わる因子

三浦 至 福島県立医科大学医学部神経精神医学講座

ランチョンセミナー 13

11月5日(土) 12:00~13:00 第6会場(706)

共催: MSD 株式会社

座長: 市来 真彦 東京医科大学病院メンタルヘルス科

LS13 うつ病治療の最適化について—うつ・不安・不眠のベストプラクティスを目指して—

菊地 俊暁 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

ランチョンセミナー 14

11月6日(日) 12:10~13:10 第1会場(コスモス)

共催: エーザイ株式会社

座長: 内村 直尚 久留米大学学長

LS14 不眠症に対する薬物治療の最適化

岸 太郎 藤田医科大学医学部精神神経科学講座

ランチョンセミナー 15

11月6日(日) 12:10~13:10 第2会場(オリオン)

共催: 住友ファーマ株式会社

座長: 中込 和幸 国立精神・神経医療研究センター

LS15 統合失調症治療において経皮吸収型抗精神病薬が果たしうる役割

鈴木 健文 山梨大学医学部精神神経医学講座

ランチョンセミナー 16

11月6日(日) 12:10~13:10 第3会場(601)

共催: 日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社 医薬開発本部

座長: 岩田 仲生 藤田医科大学医学部 精神神経科学講座

LS16 統合失調症およびその認知機能障害における Glu-GABA 神経伝達の関与

西川 徹 昭和大学医学部薬理学講座 医科薬理学部門

ランチョンセミナー 17

11月6日(日) 12:10~13:10 第4会場(606)

共催: ヴィアトリス製薬株式会社 メディカル・アフェアーズ統括部

座長: 渡邊 衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室

LS17 看過されがちな不安症—全般不安症を中心に—

大坪 天平 東京女子医科大学附属足立医療センター精神科

ランチョンセミナー 18

11月6日(日) 12:10~13:10 第5会場(701)

共催: 塩野義製薬株式会社/武田薬品工業株式会社

座長: 伊豫 雅臣 千葉大学大学院医学研究院精神医学教室

LS18 診断および治療的観点からみた成人 ADHD—Guanfacine による薬物療法を再考する—

近藤 毅 琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座

ランチョンセミナー 19

11月6日(日) 12:10~13:10 第6会場(706)

共催: Meiji Seika ファルマ株式会社

座長: 嶽北 佳輝 関西医科大学医学部精神神経科学講座

LS19 エビデンスに基づいた統合失調症薬物療法: 抗コリン系副作用や高プロラクチン血症などに留意した薬剤選択

大矢 一登 藤田医科大学医学部精神神経科学講座

日本臨床精神神経薬理学会 2022 年ポール・ヤンセン賞、学会奨励賞および Young Researcher 賞

ポール・ヤンセン受賞講演

11月5日(土) 16:30~17:20 第4会場(606)

座長：下田 和孝

獨協医科大学精神神経医学講座

PJ-1

遅発性ジスキネジアと持効性抗精神病薬注射製剤：副作用自発報告データベースを用いた解析

三澤 史斉 山梨県立北病院

PJ-2

治療抵抗性統合失調症患者におけるクロザピンへの暴露と副作用との関連についての包括的評価：母集団薬物動態解析

野村 信行 ミュンヘン工科大学/慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室/山梨県立北病院

学会奨励賞および Young Researcher 賞

NEN1

Driving performance of euthymic outpatients with bipolar disorder undergoing real-world pharmacotherapy

岩本 邦弘 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学分野

山口亜希子 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学分野

NEN2

Risk factors for early-phase clozapine discontinuation : A nested case-control study

築地茉莉子 千葉大学医学部附属病院薬剤部

NEN3

入院患者における向精神薬使用と転倒・転落発生に関する症例対照研究

森下 千尋 東京医科大学精神医学分野

YR

日本と英国における HLA バリエントを基盤とした薬理ゲノム学ガイド下でのクロザピン投与管理方法の費用効果

二宮 光平 藤田医科大学精神神経科学

日本神経精神薬理学会 第 11 回学術奨励賞受賞講演

日本神経精神薬理学会 第 11 回学術奨励賞受賞講演 11月4日(金) 10:50~11:50 第3会場 (601)

座長：糸川 昌成 公益財団法人東京都医学総合研究所統合失調症プロジェクト

NPA1 精神疾患に対する薬物治療の最適化：システムティックレビューとメタアナリシスを用いた研究

岸 太郎 藤田医科大学医学部精神神経科学

NPA2 神経回路の形成・可塑性のメカニズムと病態生理学的意義に関する研究

篠原 亮太 神戸大学大学院医学研究科薬理学分野

日本精神薬学会 受賞講演

日本精神薬学会 受賞講演

11月4日(金) 10:50~11:50 第4会場(606)

座長：黒沢 雅広 昭和大学附属烏山病院

PPA1 向精神薬の適正使用に向けた副作用発現リスク因子の抽出

小林 聖子 篠田好生会千歳篠田病院薬剤師

PPA2 ブレクスピプラゾールの切り替え方法による投与継続期間への影響の調査

阪岡 倫行 医療法人せのがわ瀬野川病院薬剤課